

【京都府青少年育成協会会長奨励賞】

「未来をつくる相互理解の心 中国留学で学んだこと」

京都府立洛北高等学校附属中学校 1年

只 友 明 徳



僕は、小学 2 年生の時に、中国に留学したことがあります。そこで学んだことは、国や文化を越えてお互いに理解し合える社会になることの大切さです。日中関係は今、良好とは言えません。これを改善していくために必要なのは、お互いの良い部分を見つけ、理解し合うことだと思います。周りの人の意見や勝手なイメージを持つのではなく、「自分の考え」が大事だと思います。日中間にもさまざまな文化や習慣の違いがあるのです。

僕の母は、中国人で祖父母は中国の天津市に住んでいます。そして、「小さいうちに中国語を学ばせてあげよう」「祖父母と一緒に暮らせる時間を作ってあげよう」と中国に 3 ヶ月留学しました。僕は、南開大学附属小学校に転校しました。幼い頃から、祖父母の家には何度も行ったことがありますが、留学当時は小学校 2 年生、中国語で勉強しなければいけないし、同じ年頃ぐらいの中国の子と話すのはほとんど初めてだったので、凄く不安でした。しかし、その不安は、あっさりと言切られました。担任のリー先生やクラスの仲間達はとても温かく迎えてくれました。「どこから来たの?」「困ったことがあれば言ってね」という声かけがとても嬉しかったです。今まであまり知らなかった中国人の内なる優しさに気づきました。小学校生活でどんどん友達も増え、中国語も上達しました。僕は、文化の違いにもたくさん触れました。中国は、昔から昼休みが長く、僕の学校でも、1 時間半の昼休みがありました。映画を見たり、お弁当を食べたりして過ごすのですが、掃除がありません。日本の学校では必ず掃除があります。そこで僕は、先生に雑巾がけをすることを提案しました。先生もクラスのみならず提案に乗ってくれて、まず僕がお手本をみせることになりました。日本で習った方法で廊下を掃除してみせると、みんな、「凄い」と言ってくれました。文化の違いを実感した瞬間でした。それから、長い昼休みのうち、10 分ほどを当番制で掃除することになりました。僕は、少しでもみんなの役に立てた気がしてとても嬉しかったです。さらに、このことが広まり、他学年や他の学級の先生から「うちのクラスにも日本の掃除を教えてほしい。」との声が沢山あつたのです。そこで、僕と学級委員長の 2 人で、低学年を中心に沢山のクラスに教えに行きました。どのクラスもとても喜んでくれて、「日本人は凄い」とたくさん褒めてもらいました。これで、中国の中で少しでも日本の印象が良くなったのであれば、僕はとても嬉しいです。

祖父母との楽しい生活を満喫していた頃、忘れられない出来事が起こりました。国語の授業で、教科書に載っている「王二小」という日中戦争時代の実話を元にした、敵に殺された少年の物語を学習した時のことです。このとき、ほとんどの子が一瞬僕の方を見ました。先生は、「これは昔の話であり、彼を見ても分かるように今の日本人は、とてもいい人達です。」と日本人と僕をフォローしてくれました。僕の 2 つのふるさどである中国と日本の歴史にはさまざまなことがあり、未だに両国の間には溝があるのを知って、一瞬とても複雑な思いを感じました。そしてなんだか今までのみんなとの関係が崩れていったように感じました。しかし、みんなは今までと何の変わりもなく僕に接してくれました。クラスのみならず接してくれたのは、お互いのことをよく知り信頼関係が生まれていたからだと思います。

新しい歴史をどう作っていくかは、僕たちのような新しい世代にかかっています。でも今の日本人は、正直他国への理解が薄いと思います。僕は、小さい頃から母から中国の料理などを教えてもらっていたので、一般の人よりは中国について詳しいです。しかし、実際に行くと全然知らないことや、イメージががらりと変わることが沢山ありました。中国では、普通のことであっても日本ではマナーが良くないと思われることがあります。しかし、中国の人が日本のマナーを知らないだけのことです。「郷に入っては郷に従え」というように、その土地の文化に合わせることも大事だと思いますが、互いの文化の理解があってこそそのものだと思います。だから、知らない人がいれば、みんなで教えてあげれば良いだけのことだと思います。中国で過ごした 3 ヶ月は僕にとってかけがえのないものとなりました。これから日中をつなぐ「橋」になるためにいかせるかは、僕次第だと思いました。中国と日本のハーフであるというこの少し特別な境遇を僕はほこりに思いますが、両国の健全な関係をつくることに貢献したいと思っています。